

## 平成 27 年度 大阪大学秋季卒業式・大学院学位記授与式

### 総長式辞

本日、大阪大学から新たな一步を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士・博士課程修了生の皆さん、大阪大学を代表いたしまして心よりお祝いを申し上げます。卒業式・学位記授与式にあたり、この日を迎えるまでの皆さんの日々の研鑽とたゆまぬ努力を讃えます。また、この日まで長きにわたり皆さんの勉学と研究を支えてこられましたご両親、ご家族の方々には、深甚なる敬意を表するとともに心よりお喜び申し上げます。

この大阪大学は、私が 30 年近くにわたって教育・研究に邁進してきました愛すべきホームグラウンドです。私は、その大阪大学の第 18 代総長に先般 8 月 26 日に就任いたしました。したがって、本日の式典は私が総長として執り行う最初の大きな行事の一つであり、このように皆さんに語りかける機会をもてることを大変嬉しく、光栄に思っております。

さて、本日の学位記が授与される方の中に、どうしても皆さんに紹介をしたい方がおられます。博士（人間科学）の学位を授与される姉崎正治さんです。御年 73 歳であり、30 年前に東京大学で論文博士として取得された工学博士に続いて、本日二つ目の博士号を取得されることとなります。姉崎さんは、中学を卒業後、集団就職により住友金属工業株式会社和歌山製鉄所に入社され、企業研究者として独学研究を 27 年間続けられた末に、東京大学工学研究科において博士号取得の夢を叶えられました。その審査会では「満場一致、文句なしの合格」だったと伺っております。それから、姉崎さんは、同企業を定年退職後、大阪外国語大学外国語学部にて社会人入学され、スペイン語・歴史学を学びつつ、本学人間科学研究科のグローバル人間学の博士課程に進学され、環境問題に関する文理融合研究に挑戦されてこられました。特に、持続可能な地球社会を目指すサステナビリティ学の視座から貴金属鉱山業の持続可能性を描き出す問題解決への試みをなされました。

私は、この快挙の報に接しました時、飽くなき向学心、探求心に深い尊敬の念を抱きました。また、大阪大学が、現在、さまざまな高度人材プログラムで目指しております、異なる分野、特に自然科学分野と人文学・社会科学分野をク

ロスした高度な博士人材の輩出の典型あるいは模範を姉崎さんは実現してくださいました。姉崎さん、本日は誠にありがとうございます。

さて、私は、先般、6月12日に総長予定者として決定されて以降、多くの報道関係の方々からインタビューを受けてきました。その際に、何時も受けた質問があります。それは、「大阪大学では、今後、どのような学生を育てたいですか。」という質問です。

私は、その質問に対して、『グローバルとローカルを組み合わせた「グローバル」という言葉があります。一時かなり流行した言葉ですが、身をもってこれを実行することは容易ではありません。だからこそ、この言葉を体現するような学生を育てたいのです。』と答えています。例えば、今日は国内の山間部に溶け込み住民とコミュニケーションを取り、住民に信頼されて調査・研究をしているかと思えば、明日はニューヨークでの国際会議の檯舞台で発表するといった、地域に根差した視点を持ちつつ世界も視野に入れるような学生、つまり、大阪大学のモットーである「地域に生き 世界に伸びる」を地で行くような学生のことです。単にグローバルだけというのは、上滑りの感じがしています。このような理想とする人材像にとって、「コミュニケーション力」及び「国際性」がいかに重要かは容易にご理解いただけると思います。

これから企業や行政、あるいは民間の研究所やシンクタンクに活動の場を移される方もおられれば、さらに大学で研究を続けられる方もおられるでしょう。そして、その活動の期間は、大阪大学で勉学に励まれた期間よりずっと長くなります。そこでは、先にお話した「コミュニケーション力」、「国際性」に加えて、どのような能力が求められるのでしょうか。それは、「デザイン力」と「教養」だと思います。

デザイン力とは、ある課題に直面した時に、与えられた環境、与えられた拘束条件のもとで最適の解に導く問題解決能力、これを「デザイン力」と言ってもいいと思います。例えば、建築物の場合は、与えられた敷地面積や予算、さらにさまざまな法的規制等を考慮した上で、建築主の意向に沿って最適な建物を設計していく力、しかもこの作業を遂行するに当たって、本当に必要な人々のネットワークを構築する力、それが「デザイン力」です。

一方、「教養」については、大阪大学第16代総長鷲田清一先生は、次のように言っておられます。『教養とは、一つの問題に対して必要ないくつもの思考の補

助線を立てることができるということです。言い換えると、問題を複眼で見る  
こと、いくつかの異なる視点から問題を照射することができるということです。  
このことによって、ひとの知性はより客観的なものになります。』

つまり、デザイン力、教養を身につけることにより、多角的な観点から問題を  
捉え、与えられた状況のもとで多角的・客観的な指標に基づき最適な解を導く  
ことができます。現代では、このような能力を身につけた人材こそを、産業界、  
行政機関、そして教育研究機関が異口同音に強く求めています。

実は、これまでお話ししました「教養・デザイン力・国際性」は、大阪大学が  
平成16年度からの国立大学法人化を迎えるに当たり定めた教育目標です。さら  
に、コミュニケーション力についても、大阪大学が全国の大学に先駆けその重  
要性を提示し、本学の学部学生、大学院生がその力を涵養することを目的とし  
たセンターを設置しました。したがって、本学は四つの力、能力を備える  
教育にいち早く注目し、独自性を長年発揮してきたと言っても過言ではありま  
せん。

そのような本学の教育方針のもとで過ごされ、本日、学部を卒業される皆さん、  
大学院修士・博士課程を修了される皆さんは、「教養・デザイン力・国際性・コ  
ミュニケーション力」を備えておられることを確信しております。今後、それ  
ぞれに本学で培ったこれら四つの力及び能力、さらに知恵と知識と技能を存分  
に発揮されることを心より願っております。そして、皆さんが、どのような分  
野に進もうとも世界中の国・地域で、その分野において周りの人々から信頼さ  
れ、リーダーシップを発揮して、自国の将来はもちろんのこと、人類社会の発  
展と福祉の向上に大いに貢献してくださることを期待しております。

最後になりましたが、ここまでの道のりの中、家族、友人そして研究仲間、加  
えて皆さんを陰で支えてきた大勢の方がいます。改めてその方々への感謝の念  
を思い起こしてください。そして、皆さん一人ひとりのこれからの生涯が、健  
康と幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、私の式辞とい  
たします。皆さん、改めておめでとうございます。

平成27年9月25日  
大阪大学総長 西尾章治郎